

Brhadāranyakopaniṣad の一考察

—第三章について—

細田典明

I Brh. III. 4 Janaka 王が催す祭祀における Yājñavalkya を中心とした討論会について述べる。III, 9. 2 における Yājñavalkya と Sakalya の問答は ŚB. XI, 6. 3. 4 JB. II, 76-77. 2 である。而 Br. の冒頭は III, 1. の冒頭に対応するところから、第三章は Br. の説話を輪郭物語として採用したと考えられ、各所に増補・改変をともなう Br. の文章がほぼ全面的に採録されている。

- I. ŚB. XI, 6, 3, 1-2. Brh. III, 1, 1-3. (1-4. M.)
- II. " 3b. " 9, 18. (19. M.)
- III. " 4-10. " 9, 1-9. (1-10. M.)
- IV. " 11a. " 6, 1. fin
- " 11c. " 9, 26. (28. M.)

第三章はこの輪郭の中で、七人のシラヤンの問答を加え、Sakalya の問答を追補しているが、各節の中には相互に類似する文章もある。その中で、III, 3. 4 7, 6. 4 8. の各節は AV. の思想的讃歌との関連があり、次に、brahman の知をめぐって考察する。

II III, 3. 4 7, 6. 4 女と云ふこと Gandharva 名 Sudhanvan Āṅgīrasa (3), Kabandha Ātharvaṇa (7) など、それな伝えた語を質問者 Yājñavalkya と問ふ。ゆゑに各節は、sūtra と

antaryāmin を知る者は brahmavid となる(とされるが、Skambha 讃歌における、生類を織り込む (ota-)sūtra を知る者は [Brahmanam mahat を知る] とされる、この句は brahmavid と同義である。また ota- の語は III, 6. 4 8. の「何に経緯に織り込められる (ota, prota-) といふ Gārgi の質問とみられる。protā を併記する表現は VS. 32, 8. 2 にもみられるが、32, 8-12. 4 Vena 讃歌を改変したものである。続く 32, 9. (4 AV. II, 1, 2.) では神秘について Gandharva が語らうとするが、媒介者として神秘を伝える Gandharva の性質は III, 3. 4 7. 2 轉をいひつゝ。

III, 3. 4 7. 2 女と云ふこと Gandharva 名 Āṅgīrasa 家系・Ātharvan 家系のおのひめであるが、brahman の知を問家系の聖仙が受け継いだことは vaiśa なら知らる。Brahman を一代目とせば、十一代目 Atharvan Daiva、十二代目 Dadhyac Ātharvaṇa である、十六代目 Ayasya Āṅgīrasa の名ならなる。この系譜に関連して、AV. 所屬の Muṇḍaka Uṣ. は Brahmanam brahmavidyā を授け Atharvan とは、Āṅgīrasa → Bhṛatadāja → Āṅgīrasa と継承する。Saunaka 名 Āṅgīrasa と尋ねる形式が始まる。III 三章各節の問答は brahmodya といふのである。L. Renou は brahmodya を Uṣ. の中心構造をなす、出發点であるといふ。この brahmodya は brahman について論議するといふのである。三章の brahman の知をめぐって、特に AV. 所屬の文献との関係が深いという観点から考察を加えた。

1 cf. H. Oertel, JAOS. 15, 1892, 238-40. 2 L. Renou, IC. 14-3, 1948. (註目録 VI f 25) 87-8. 3 この説話は、メーナ文獻にも伝承されているが、I-IV と分類する上は問答の内容は

